

鹿児島大学教育学部と附属学校園との共同研究について

日吉 武

1. 共同研究に関する組織の現状

鹿児島大学教育学部には、附属幼稚園、小学校、中学校、特別支援学校の4校園がある。令和5年4月より、校園長職を大学教員から現職派遣教員による専任体制へと移行した。またそれに伴い、新たに附属学校園統括長を置き、副学部長の一人が兼務することとなった。

学部と附属学校園との共同研究については、「教育学部附属学校園共同研究」として鹿児島大学教育学部附属学校園共同研究分科会が申請を受け付け、とりまとめを行っている。また、分科会でとりまとめるものには含まれない、共同の研究や実践も複数取り組まれている。

2. 学部と附属学校園との共同研究について

「教育学部附属学校園共同研究」には、毎年、附属幼稚園から1～2件、附属小学校から4件、附属中学校から4件、附属特別支援学校から3件の申請がなされている。これらの申請については先述の分科会で審議の上、学部一般経費として研究費を支援し活用してもらっている。

令和5年度については、以下のような研究課題が取り組まれている。(課題名に続いて共同研究対象教員を記す。)

1) 附属幼稚園

- 幼児教育における「木育」活動の実践:学部技術科教員
- 幼児期における「夢中になる遊び」の心理とは:学部心理学科教員

2) 附属小学校

- 主体的に問題解決しようとする態度を育む理科授業の創造:学部理科教員
- 互いの考えを分かち合い、論理を追究する算数科授業の創造:学部数学科教員
- 自分なりの造形的な意味や価値をつくりつづける図画工作科授業の創造:学部美術科教員
- 学習環境づくりから自立的な学習者の支援の在り方の実践を通して:学部教育学科教員

3) 附属中学校

- 新たな時代を豊かに生きる生徒の育成:附属学校園統括長
- 数学的に考える資質・能力を身に付ける生徒の育成:学部数学科教員
- 3Dプリンタを活用し、創造性を働かせて自分なりの意味や価値をつくり出す美術科教育の在り方についての考察:学部美術科教員
- 主体的に社会の形成に参画し、新たな時代を豊かに生きる生徒の育成:学部社会科教員

4) 附属特別支援学校

- 知的障害のある子どもが主体的に学習に取り組むことのできる授業づくり:学部特別支援教育コース教員
- エビデンスに基づく知的障害児の発達と特性に応じた支援:学部特別支援教育コース教員

○アプリケーションを用いた知的障害児への書字支援:学部特別支援教育コース教員

上記の共同研究においては、複数回に渡る附属教員と学部教員の協議が持たれ、附属学校園における公開研究会等も絡めながら、研究活動が進められている。

3. その他の共同研究や学部と附属学校園の連携

附属学校園の各教科で、学部教員と実践研究内容について検討したり、指導助言を受ける等の連携が、継続的に行われている。また各附属学校園の研究公開においては、学部教員が指導助言者として参加、公開授業の構想初期から授業づくりに参画している。さらに、ICT利活用や情報モラル教育などでも、学部教員が講話を行うなどの連携が行われている。

一方、教育学部音楽科では、全ての附属と実践可能な形で連携し、以下のような取り組みを展開している。

○音楽科講義「合唱AB」の学修成果発表として、附属中学校において合唱ミニコンサートを前後期1回ずつ開催している。(学部ホームページにYouTube動画あり。)

○附属特別支援学校高等部の生徒の学びの機会として、芸術鑑賞教室を行っている。高等部の生徒が学部音楽科の教室に足を運び、学生が企画したコンサートを鑑賞するという取り組みである。高等部生徒にとって大切な社会勉強の場の一つとなっている。

○附属幼稚園の園児の学びの機会として、「わくわく音楽会」を行っている。園児が学部音楽科の教室に足を運び、学生が企画したコンサートを鑑賞するという取り組みである。

○合唱指導について研究する音楽科教育担当の教員が、附属小学校の合唱クラブに定期的に指導に入っている。

4. 共同研究、連携の今後

財政状況に年々厳しさが加わる状況ではあるが、共同研究についての予算措置は継続し、本数を維持することを目指していきたい。また教員だけでなく、学生が附属学校園に関わる機会を増やしていきたいと考えている。具体的には教育実習だけでなく普段の日常業務を体験する活動、部活動指導補助、業務支援ボランティア等を模索している。

(鹿児島大学教育学部副学部長・附属学校園統括長・教育学部音楽科&教育学研究科教授)